

亀五郎が二十五才になったとき、慶応四年は、明治元年となり、新しい政府に変わっていきました。世の中も急に変わりはじめ、須賀川、郡山などもけいぎいを中心としてにぎやかさを増し、物資の輸送も活発になってきました。

江戸時代から奥州街道の宿場町としてにぎわっていた須賀川は、問屋も多く、会津地方、中通り、いわき方面からも、いろいろな物資が集まり、また、それを各地に送り出すこともさかんでした。さらに須賀川は、きざみたばこや、生糸の産業もさかんで、中通り地方のけいぎい、文化の中心的役わりを果たしていました。

亀五郎は、これから先のことを見ぬき、少しばかりの田畑をたがやし、炭やきで終わりたいくないとつねづね思っていました。これからの世の中は、物資の輸送が必要になると考え、荷馬車による運送の仕事をはじめることになりました。

栃本村は、須賀川へ三里半(約十四キロ)、郡山、小野新町へは四里の道のりで、ほぼ中間にあり、輸送には適したきよりにあったのです。